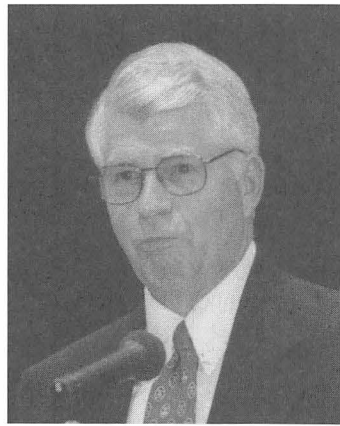


ルイス・ウォーカー氏（米国）

自ら長期投資を実践し、顧客のFinancial FreedomをサポートするFP

昨年10月、筆者はニューオーリンズで開催された全米ファイナンシャルプランナーズ協会の大会（FPA Conference）に参加した。ここで多くのCFP（Certified Financial Planner）に出会ったが、長期投資を推奨するCFPの中でも、最も迫力のある講演をされていたのが今月紹介するLewis Walker氏である。

Walker氏は日本を2度訪問し、「横浜のホテルから見た港の景色と焼き鳥の味が忘れられない」と語る、大の親日



Mr. Lewis Walker

ジョージア州在住。ジョージタウン大学から全米ナンバーワンのビジネススクールとして有名なケロッグスクール（ノースウエスタン大学）に進み、MBAを取得。1975年にCFPを取得した。

1986年から88年まで全米FP協会の会長を務めるなどアメリカを代表するFPである。また同時に、1998年から2000年まで全米投資マネジメント・コンサルタント協会の会長を務めた長期投資の啓蒙家でもある。

家でもある。

非常に面倒見のよい方で、アメリカ式の本格的FP手法について筆者の質問に本音で答えていただいている。個人的にはアメリカにおけるFPの先生でもある。

超多忙なWalker氏の仕事の合間をぬい、次の2点についてインタビューした。

1.なぜ氏は長期投資家になったか（長期投資の優位性をどう考えるか）

2.長期投資の経験から得た人生観

以下はその概要である。

（相山豊 ファイナンシャルプランナー）

歴史が裏づける長期投資の優位性

なぜウォーカーさんは長期投資を志すようになったのですか？ また、長期投資の優位性をどのように認識していますか？

——株価はランダムウォーク（ぶらぶら歩き、千鳥足）で短期的な予想は不可能だけれど、長期的には予見可能だといえるでしょう。

このことはすでに1960年代に、ポール・サミュエルソンMIT教授が指摘しています（筆者注：ポール・A・サミュエルソン「正しく予想された株価がランダムに動くことの証明」*Industrial Management Review*、1965年）。

そうなると、株のデイトレード、あるいは短期売買はギャンブルと同じで、遠からず破綻を迎える可能性が高いわけです。

それなのにアメリカではいまだに（筆者注：おそらく日本でも同じだろうが）株のデイトレードや短期売買に走る人を多く見かけます。これは非常に残念なことです。

また短期投資家には、さまざまな情報を集めること

によって株で勝てると思っている人が多いのも特徴です。日本でもそうだと思いますが、アメリカでも「こうすれば株で勝てる」類のハウツー本がよく出ています。しかしこれを信じて株で勝つことは難しいでしょう。

特に若い人にはテクニカル的なことを勉強すれば株で勝てると思っている人も見かけますが、それで勝てれば機関投資家（プロ）はみんな株で大もうけできるはずですよ。

株価は短期的には予見が難しいものですが、長期的には予見の可能性は高まるといえます。アメリカ株の過去100年くらいのチャートを見ていただければ、長期的には株価は右肩方向にきれいに上昇してきていることは一目瞭然です。

2000年にアメリカ株は直近のピークを迎え、今後2、3年は上昇しないかもしれないけれど、私はアメリカ経済の長期的な拡大を信じているので株価の今後の上昇は確信しています。

長期投資こそリスクの少ない、本当の資産形成手段であることは歴史が証明しています。日本は、アメリカのチャートとは異なり1989年に直近のピークを迎えています。私は日本経済も長期的にはアメリカと同

じく拡大することを望んでいます。

このような観点から、私は「インベスト・コーチ・プログラム」という長期投資計画（株に限らず不動産などを含む包括的な運用）を推奨しています。

何のためのお金か？

Financial Freedomの貴重さ

長期投資の経験から、どのような人生観を得ましたか？

—まず第1は「忍耐 (patient)」ですね。

投資は短期で成果が出ればよいわけですが、説明したように短期の株式投資は失敗の可能性が高い。

そこで長期投資を行うことになるわけですが、誰でも経験があるように有望だと思った株も買ってから下がってしまい、精神的につらくなることも多いわけです。このような時に我慢できないと、有望な株でも持ちこたえることができません。

忍耐 (patient) という言葉は、言うのはたやすいけれど、実行は難しいものです。

長期投資の有効性を頭ではわかっているにもかかわらず、実際に株価が買値より下落すると精神的に動揺して売ってしまい、その後の株価の回復で後悔している人をよく見

ます。

しかし自分が価値のある株だと確信したら、株価の短期的な変動や根拠のないニュースは気にせず、持ち続けることが重要です。

ウォーレン・バフェット氏も株式資には「忍耐が最も重要」だとよく言っていますが、これは人生にも通じる教訓だと思います。

次に、「Financial Freedom (お金のために働かなくてもよい状態)」の素晴らしさですね。

長期投資をする前に、まず「何のためにお金が必要か」が明確でなくてはなりません。

私はFPなので、顧客と向き合う場合にはまずこの質問をします。この回答は人によって千差万別ですが、基本的にはアメリカ人の場合「Financial Freedom」と答える人が多いです。

長期投資の結果、Financial Freedomを獲得し、自分の趣味や社会貢献に生きているアメリカ人は増えてきているように思います。そのことに私のようなFPが役立てることは何より嬉しいことです。

お金に縛られずに自由な生き方ができたなら、人生は楽しい。そのための手段が長期投資ではないでしょうか。

Lewis Walker氏の投資家心理に関するコラム 「When Is a Loss Really a Loss?」より

私は1980年代にXYZ社の株を長期保有目的で買った。なぜならXYZ社の社長を個人的に知っていて、会社に将来性があると思ったからだ。その後87年のブラックマンデーで株価は買値の50%くらいに落ちてしまった。その時にパニックに陥ってその株を売ってしまったら、長期投資のうまみを逃すことになる。

その後もXYZ社の株価は、最近52週で見た場合、高値と安値の差は39%にもなる。このことから株というものにはボラティリティが高く、怖いと考える人もいるだろう。

XYZ社株を過去52週の高値である37.50ドルで買ったとして、現在は24.97ドルに下落しているとする。この場合、この投資家は敗者であろうか。ここで動揺して売ってしまったら敗者である。私だったら、XYZ社株は過小評価されており、将来性のある会社なので長期的には37.50ドルに戻ると判断し、買い増すという選択をする。

私はXYZ社の株価を毎日見ていないどころか、数週

間も見えていない。私は株価の変動を受け入れており、株価の変動を見て一喜一憂し判断力を失いたくないと思っているからだ。XYZ社の株価は、私が考えている期間内に50ドルになると信じている。

もし株式の長期投資理論に問題があるとすれば、それは「人間の感情」だ。人は新しいニュースを聞いて動揺する。日々の株価の変動を見て不安になる。その結果、長期投資よりも短期的な利益に目が移ってしまう。長期投資にはインターネットは役に立たないのである。

行動ファイナンスの研究者によれば、新しいニュースを聞くことにより人間は何か行動を起こさねばならないと思込み、間違ったタイミングで間違った行動をする傾向にあるようだ。

ハーバード大学の研究によると、新しいニュースにアクセスしていない人は、新しいニュースに触れる人に比べて株を長期保有する傾向にあり、結果もよいようだ。